

慈悲に聖道・浄土のかわりめあり。聖道の慈悲というのは、ものをあわれみ、かなしみ、はぐくむなり。しかれども、おもうがごとくたすけとぐること、きわめてありがたし。浄土の慈悲というのは、念仏して、いそぎ仏になりて、大慈大悲心をもって、おもうがごとく衆生を利益するをいうべきなり。今生に、いかに、いとおし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏もうすのみぞ、すえとおりたる大慈悲心にてそうろうべきと云々

#### 第四章 「しかれども、おもうがごとく たすけとぐること、 きわめてありがたし」

第4組 極樂寺住職

### 巖城 孝憲

text by Takanori Iwaki

聖道浄土の「かわりめ」という言葉の理解が問題であるが、「相達するところ」とか「違い」とかの意味ではなく、もちろん「慈悲に二種あり」という意味でもない。『論註』では、「正道大慈悲というのは、慈悉に三縁あり。一には衆生縁、これ小悲。二には法縁、これ中悲。三には無縁、これ大悲なり」（「性功德」）と、三縁の慈悲ということが言われ、如来の無縁の大悲が明らかにされている。これは縁の問題であるが、今ここでは行が問題である。信国淳先生の『歎異抄講話』には、次のように説かれている。「自力をたのむ人間から、他力をたのむ人間へと移り変わるといふ、そういう私どもの移り変わり、私どもの轉身、つまり、人間変革ということがそのもとにあつて、そこから起こってくる違いである」と。人間の起こす慈悲が今、聖道の慈悲と言われているが、人間が他に対して起こす慈悲は、必ず行きづまる、助け遂げることが不可能という自覚の場において、浄土の慈悲に転換する転換点をたまわるといふこと。聖道の慈悲と浄土の慈悲と二つある話ではなく、聖道の慈悲は、その挫折において、本願力回向の浄土の慈悲にはじめて出遇い得る。この転換点は、第三章に、「しかれども、自力のころをひるがえして、他力をたのみたてまつれば、真実報土の往生をとぐるなり」と言われる「自力のころをひるがえして」といふ一点と同じであろうと思われる。

慈悉については、古来より抜苦与樂と言われ、慈は与樂、悲は抜苦を意味す

ると言われている。中村元博士『仏教語大辞典』には、「①仏・菩薩が衆生をあわれみ、いつくしむ心。万人に対する愛。②衆生に樂を与える慈（マイトリ）と衆生の苦を抜く悲（カルナー）とをいう。慈の原語は多くの場合マイトリであるが、それはミトラ（友）という語からつくられた抽象名詞で、最高の友情とでもいうべきもの。特定の人に対してではなく、すべての人々に友情をもつことが慈である。またカルナーの原意が嘆きであり、人生の苦に嘆き悲しむことであり、さらに、あわれみ、同情を意味する。」（抄出）と説明されている。龍樹菩薩の『大智度論』には、「大慈は一切衆生に樂を与え、大悲は一切衆生の苦を抜く」（第二七卷）とある。

ところが『論註』では、逆に言われている。「苦を抜くを慈と日。樂を与えるを悲と日。慈に依るがゆえに一切衆生の苦を抜く。悲に依るがゆえに無安衆生心を遠離せり」（『浄土論註』聖典二九三頁）。宗祖の曇鸞和讃に、「口論の講説さしおきて 本願他力をときたまい」（聖典四九一頁）とあるように、もともと龍樹菩薩の般若教学を研鑽し、四論のうちの一つである『大智度論』に通達していた曇鸞大師が、慈は与樂、悲は抜苦を意味することを知っておられたのは当然である。それにもかかわらず、『論註』で、逆に言われるのはなぜであろうか。

慈ということは、友情として言われるような慈しみの心ではあるが、悲ということは、胸が引き裂かれるほどの痛み・呻きを意味する。慈しむ心は、上から下へ、力ある者から力なき者へという、まだ立場を一つにはしていないが、慈しみの悲のほうは、柏手と立場を同じくしている心であり、「同体の大悲」と言われる。大慈よりも大悲のほうが一層深く、衆生を救済せんとする如来の悲願を表していると言われている。曇鸞大師は、その如来の悲願は、抜苦ではなく、与樂であると言われた。その理由はおそらく、抜苦が抜苦だけで終わったら、天上界でしかない。それは一応、苦から逃れはしたが、道を見い出さない限り、本当の解決ではない。真実の道を求める道心が眠らされる世界としての天上界は、迷い・苦しみの世界である。自分が生きてあることの意味、生かされてあったことの驚き・感動・発見、それが与樂の心として教えられている。真に自分が生きてあることの意味がはっきりさせられるならば、人はどのような悲しみ苦しみにも耐えていける。与樂とは、いのちの目覚めをうながすはたらきに出あうことである。